

イタリアンライグラス主要品種の生育収量

徳永初彦・茨木和典・小山信明

(九州農業試験場)

暖地型牧草とイタリアンライグラスとの組合せ作付体系策定のための基礎資料を得る目的で、早～晩生5品種を4回播種し、播種期の移動に伴う生育・収量の変化を検討した。その結果を報告する。

1. 試験方法

1) 供試品種：ミナミワセ(極早生)、ワセユタカ(早生)、ヤマアオバ(晩生)、山系16号(晩生)、マンモスA(極晩生)。

2) 播種期(年月日)：1974—9.7, 10.7, 11.7, 12.7

3) 播種量：10a 当り 2kg。

4) 播種法：散播。

5) 施肥量(10a 当り成分量・kg)：基肥—窒素 10, 磷酸25, 加里10。追肥—刈取後窒素10, 加里10。

6) 試験場所：熊本(西合志), 黒色火山灰畑土壌。

7) 刈取り高さ：7～10cm。

2. 試験結果と考察

1) 発芽・定着状況：各品種とも11月7日播種までは発芽日数5～8日、発芽歩合80%以上をしめし、順調に発芽した。それより遅れた12月7日播種では発芽日数16日、発芽歩合30%以下となり、発芽が極めて不良となった。これは、播種後気温が急激に低下し、11℃以下で経過したためと思われる。また、12月7日播種は定着した株も冬期(1～2月)の凍上害により枯死し、完全に消滅した。

2) 初期生育：播種後70日めの草丈は40～50(9月播種)から8～12cm(11月播種)で、播種期別には9>10>11月、品種別にはワセユタカ>ヤマアオバ>山系16号>マンモスA>ミナミワセの順位となった。このように生育初期の草丈伸長は播種期がおくれるほど緩慢となり、その度合は晩生ほど大であった(極早生短稈種ミナミワセを除く)。

3) 刈取り時期：そのため、山系16号とマンモスAは9月7日播種でも年内刈取りが出来ず、3月17日ようや

く1番草を刈取った。ヤマアオバは晩生種であるが、前記2品種に比べると初期生育が旺盛で、9月7日播種でもミナミワセ、ワセユタカ同様、年内刈り(11月27日)が可能であった。最終刈取りは早生系品種5月中旬～6月上旬、晩生系品種6月中旬～下旬となった。

4) 乾物収量：収量は各品種とも播種期が遅れるほど生育日数が短縮され低下した。その傾向は晩生品種ほど大となり、9月7日播種に対し10月7日播種では約20% 11月7日播種では約60%減収した。したがって、晩生系品種は9月播種、6月中旬最終刈取り(10a 当り約1.5t)、早生系品種は9～10月播種、5月中旬～6月上旬最終刈取り(0.9～1.3t)が最高収量をしめした。

第1表 播種期別収量と4～6月の乾物生産 1974

項目 品種	播種期 (月・日)	収量 (kg/10a)	9月の収 量対比 (%)	生育日 (日)	CGR (g/日)	乾物重(kg/10a)		
						4月	5月	6月
ミナミ ワセ	9.7	862	100	254	3.4	137	246	43
	10.7	910	105	224	4.1	204	351	19
	11.7	497	58	193	2.6	291	206	72
ワセ ユタカ	9.7	1,286	100	284	4.5	203	381	185
	10.7	1,179	92	252	4.7	242	292	240
	11.7	958	75	221	4.3	313	412	233
ヤマ アオバ	9.7	1,561	100	310	5.0	278	340	250
	10.7	1,359	87	280	4.8	245	317	197
	11.7	658	42	249	2.6	151	295	189
山系16号	9.7	1,496	100	310	4.8	248	497	210
	10.7	1,325	89	280	4.7	284	425	200
	11.7	649	43	249	2.6	36	371	180
マンモス A	9.7	1,524	100	310	4.9	309	486	251
	10.7	1,271	83	280	4.5	313	323	162
	11.7	743	49	249	3.0	28	356	267

注) 収量：乾物重, $CGR = \frac{\text{収量(g/m}^2\text{)}}{\text{生育日数(日)}}$

以上の結果から、早生系品種は暖地型牧草の長期利用型草種(グリーンパニック、ローズグラスなど)と、晩生系品種は暖地型牧草の短期利用型草種(ヒエ、ホワイトパニックなど)との組合せが可能と思われる。